

43 栄照寺本堂

設計：新田正樹
施工：峯工務店

安田徹也

竹中大工道具館学芸員

■はじめに

喻えるなら夢の中の建築だろうか。場面場面はリアルなのだがそのつながり方が超現実的で、いつの間にかさっきとは違う所にいる筈なのに、当人はそれを不思議とは思わない。^{えいじょうじ}栄照寺本堂は例えばそんな建築である。『建築と社会』誌には初登場となるが、今回は関西のポストモダン期の重要なとして本作品を紹介したい。

本稿の執筆に際し、設計者の新田正樹氏（1953～）、竣工時の御住職である木村栄氏（1935～）と奥様の木村尚代氏、現住職の木村慶司氏にお話を伺いする事が出来た¹。本稿の内容は全て上記の方々にお聞かせ頂いた事である。

■新田正樹氏の略歴

まずは新田正樹氏の略歴を紹介しよう。新田氏は広島県神石郡三和町のお生れ。三原工業高校建築科へ入学し、所属した製図部では全国のコンペにも入選し当時から設計志望だったが、1971年4月に工事係として大成建設に就職。工事部採用の新人は設計部で研修を受ける事になっており、当時有楽町にあった大成建設東京支店では、後に大成建設本社が入る新宿センタービルの設計をしていたとの事。研修を終え監督として最初に配属された現場は熊谷市の市民会館で、新田氏は図書館棟を任された。次に東京の田町の森永プラザビル（鹿島とのJV）に移り外壁のプレキャストコンクリートを担当。こうして着実に現場経験を積むのだ

が、本来の新田氏の志望はあくまで設計にあった。設計部への異動も打診されたが、最終的に大成建設を退社。大阪に移って1973年に月岡建築事務所で半年、1974年から新御堂設計で1年半働き、1975年にフリーのドラフトマン活動を開始。井上久雄建築設計事務所、類設計室、大建設計、日建設計などの仕事に携わり、ロッテホテル1号店建設のため戸田建設・泉沢設計の仕事でソウルに1年間いた際は、終了後にヨーロッパに足を運び4～5ヶ月かけて各地を視察した。その時に最も感銘を受けたのはコルビュジエによるロンシャンの礼拝堂であったとの事で、秩序より混沌を良しとする新田氏の感性を物語る挿話である。

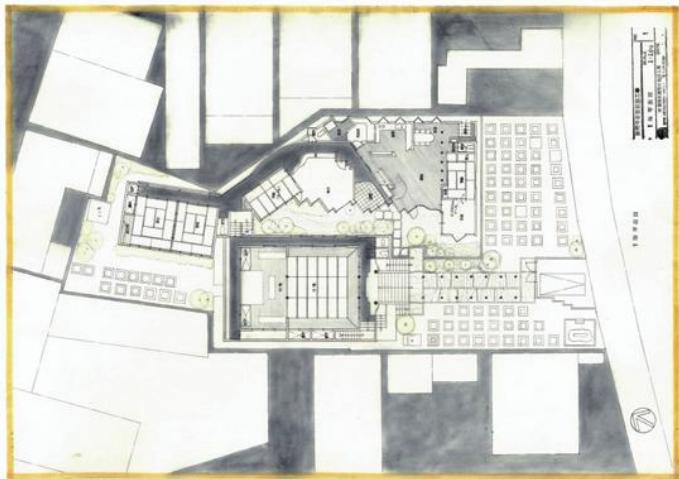
そして1982年に新田正樹建築設計工房を設立（1995年に新田正樹建築空間アトリエに改称）。独立後もドラフトマンの仕事が続いたが、併行して独学でコンペへの応募を重ね、4件目くらいで初当選したのがウッドリーム大阪のコンペであった。審査委員長は西澤文隆氏である。同作は1985年に竣工し、その後も新田氏は作品の発表を重ね、1989年に舞い込んできたのが栄照寺本堂新築の仕事である。

■栄照寺本堂新築までの経緯

栄照寺は大阪市城東区今福南1-5-21にある浄土真宗本願寺派のお寺。1883年再建の本堂や1918年再建の庫裏、石垣上の鐘楼等があったのだが、それらは1945年6月15日の空襲で全て焼失してしまう。当時の御住職は木村武夫氏（1911～86）で、その長男が今回お話を聞きした木村栄氏である。



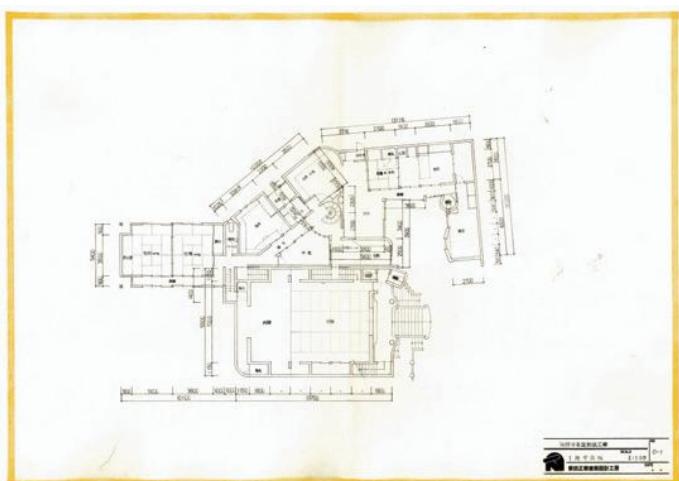
①栄照寺本堂を西から見る。本堂の西側面の階段を上って鐘樓に至る。正面と側面、背面はそれぞれ全く異なる印象の立面になっている。



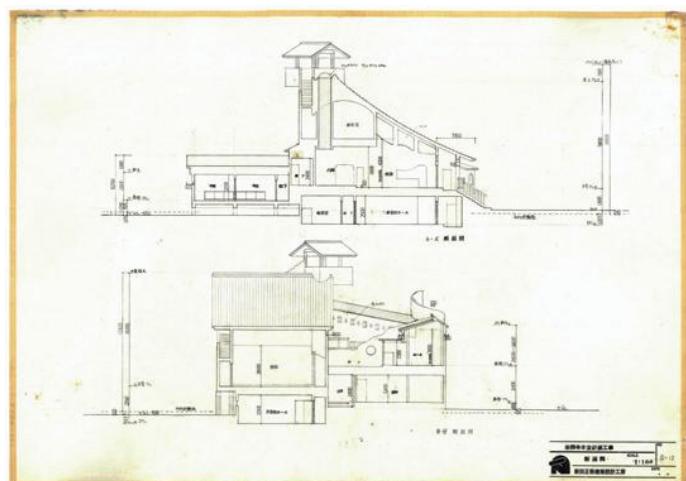
②栄照寺本堂当初案 一階平面図 1/100
面図下が本堂、上が庫裏、左の二室が客殿。本堂は参道に正対する。



③栄照寺本堂当初案 断面図 1/100
木造を想定している。屋根はむくった片流れ。小屋裏には納骨堂を設ける。



④栄照寺本堂実施案 一階平面図 1/100
本堂と庫裏、客殿の接点が増え、全体の動線は回廊状になる。



⑤栄照寺本堂実施案 断面図 1/100
屋根の上に鐘楼を載せる。天窓から御本尊までの光ダクトがある。

図版出典 ②～⑤：新田正樹建築空間アトリエ所蔵 ①、⑥～⑯：筆者撮影（2022年1月・3月）

当時栄氏は現在の兵庫県たつの市に疎開しており、疎開先の小学校で4年生を終え、5年生の新学期となる1946年4月に今福に戻ったのだが、その時にはもう焼け跡は片付けられ、鐘楼の石垣も撤去されて境内は大根畑になっていた。あまりの変りように狐につままれた様だったという。

境内の裏に三軒長屋があり、終戦直後はその一軒を借りて武夫氏夫妻と栄氏を含む子供5人の計7人家族が暮らした。境内の復興は檀家の宮大工さんが建てた小さい御堂から始まる。その後八畳二間の住宅兼仮本堂を増築して家族もそちらに移り、この仮本堂で約40年を過ごす事になる。また、戦前は境内にお墓は無かったが、今福小学校の隣の村営墓地が手狭になったため戦後にその一部を栄照寺に移す事となり、その後もお墓が増えて境内の四分の一ほどが墓地となった。そして1986年に武夫氏が亡くなり、翌年に住職を引き継いた栄氏が檀家さんの後押しも受け本堂再建を決意するのである。

ところで栄氏は結婚後は富田林の金剛園地に引っ越し、法務のため車で今福との間を往復していたのだが、その道中にあった国道309号沿いのウッドリーム大阪が気になっていた。栄氏は1986年3月に今福に居を戻すが、その後ウッドリーム大阪の隣に新田氏設計のゲストハウスやすら木が建設される²。これらの作品に心惹かれた栄氏は、設計者の新田

氏にコンタクトを取った。新田氏以外にもう1人、栄氏の親戚のお寺を設計した建築士も候補に挙がっていたのだが、2人から本堂の設計案を出してもらって栄氏御家族および世話人の方々で協議した結果、全員一致で新田氏に本堂再建を依頼する事に決まったのである。

■栄照寺本堂の特徴

焼失した旧本堂は伝統的な真宗本堂だったが、栄氏は子供心に暗くて不気味な建物だと思っていた。また内外陣境^{ないげ じんざかい}が区画され御本尊の阿弥陀如来が見えづらいのも不満だった。そのため新しい本堂は内部を明るくして御本尊がよく見える様にして欲しい。これが栄氏の第一の要望である。新田氏も最初は真宗本堂のしきたり等があるのかと思っていたが、そうした要請は一切無かったとの事である。従来とは異なる形式に、というのが本堂設計の基本方針であった。

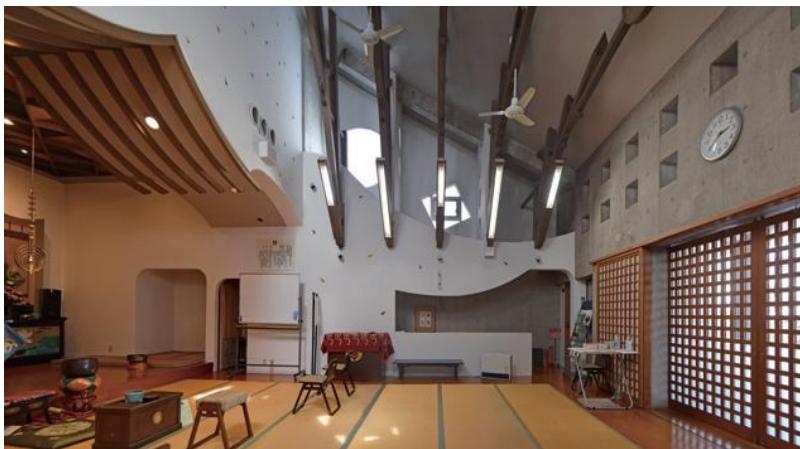
更に栄氏は次のような要望を出した。建物の外観は片流れの大屋根として欲しい。そうすれば両流れの約2倍の棟高になる。正面から見た時の巨大な瓦屋根のインパクトを重視して、一目でお寺だと分かる様にして欲しい。本堂の概形はこの栄氏の要望に沿って作られた。小屋裏に納骨堂を設けるのも当初からの要望である。



⑥栄照寺本堂を南から見る。本堂は参道に対してやや左に振れている。



⑧本堂内陣を南から見る。切妻の化粧垂木上部の壁には散華が描かれる。



⑦庫裏正面。2003年に新田氏の設計で改修されている。



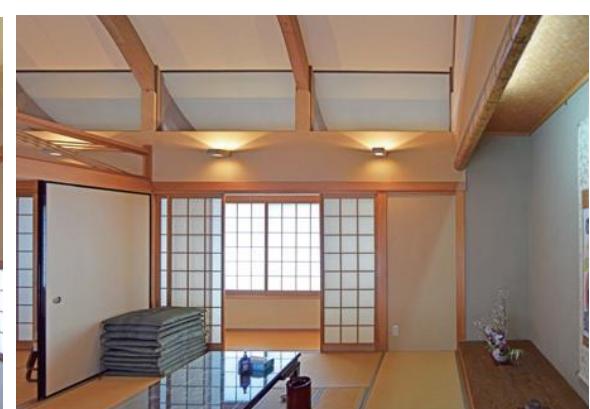
⑩本堂内陣の御本尊には天窓からの光が降り注ぐ。



⑪客殿の水屋。



⑫客殿床の間を南から見る。湾曲した集成材で円天井を支える。



⑬客殿を東から見る。落掛は四方竹、床天井は網代。



⑯庫裏の玄関の傘立て。



⑯庫裏の玄関ホール。奥に中庭を望む。



⑯玄関ホールから居室への入口。

また、栄氏はかつて訪ねた敦煌の莫高窟の印象が強烈に残っていた。そのため本堂内部は、内部ではあるが外部的な雰囲気にして欲しいと要望した。これは非常にユニークな要望だと思われる。栄氏のこうした感性が新田氏との協同を実り多いものにしたのであろう。

これらの要望を受けて新田氏が最初の案をまとめた（図②③）。新田氏のデビュー作であるウッドリーム大阪は集成材を使った巨大な木造建築で、その後も新田氏は大規模木造建築を複数手掛けており、栄照寺も当初は木造を想定していた。当初案はむくろい屋根で、木造なので内外陣境に柱が立つ。庫裏と本堂の接点が一か所のみで、本堂が参道に正対するのも当初案の特徴である。この当初案をもとに協議を重ね、本堂の配置は参道に対してやや斜めとなり（図⑥）、本堂と庫裏の接点を増やして全体の動線は回廊状となった（図④）。そうした協議の中で新たに提出された要望が鐘楼の再建である。

上記の様に戦前には鐘楼があった。戦後は鐘楼の無い状況が続いたが、この機に何とか復活させたい。しかし境内には墓地が増え、現行の設計案では鐘楼を建てる余地は無い。そこで新田氏が提案したのが、屋根の上に鐘楼を載せるという前代未聞のアイデアである。そして驚くべき事に、栄氏だけでなく世話人や檀家さんもすんなりそれを了承したという。こうして本作品最大の特徴である屋根上の鐘楼が誕生した。この鐘楼を支えるため本堂はRC造となり、庫裏と客殿のみが木造となった。設計期間は1989年6月から1991年3月。1991年4月に起工し、竣工したのは1992年10月である。

それでは本堂を見ていこう。境内に入ると巨大な片流れ屋根が参拝者を迎えてくれる（図⑥）。正面にはエンタシスのある柱が立ち、組物や垂木をデフォルメした造形が配され、一目でお寺と分る。柱は打放しで、型枠でエンタシスを作るのは大変だったとの事。

続いて本堂内部に入ると外陣上部には集成材による梁が架け渡されている（図⑧⑨）。これは木造だった当初案の名残で、構造的には効いていない化粧材である。明るく開放的な内部は栄氏が望んだとおりで、内外陣境の上部を切妻の化粧垂木で莊厳するのも面白い。須弥壇等も形は新田氏がデザインし、そこに日本画家の方が蓮華を描いた。また天窓は新田氏が多用するモチーフの一つだが、ここではそれが御本尊を照らすスポットライトとなっている（図⑤⑩）。

一旦本堂を出て、側面の階段を上っていくと鐘楼にたどり着く（図①）。鐘楼をどのように取り付けるかも新田氏が苦心した点で、最終的に約45度振っているが、これには鐘楼を西本願寺の方に向けるという意図もあったとの事である。

客殿は新田氏が初めて手掛けた数寄屋建築（図⑪⑫⑬）。炉が切られ、縁の突き当りには水屋を設けて茶席にも対応できる様になっている。四方竹の落掛けや網代の床天井などの伝統的手法と、湾曲した集成材による円天井などの新田氏ならではの造形が同居する。

そして今回は詳述できなかったが、庫裏も非常に洗練された空間である事を申し添えておきたい（図⑭⑮⑯）。庫裏の二階と正面側は2003年に新田氏の設計で改修されており、新田氏曰く当初よりも改修後の現在の立面の方が気に入っているとの事である（図⑦）。

■おわりに

旧規にとらわれない御住職と挑戦的な建築家が生み出したアバンギャルドな本作は、30年後の現在、「鐘の鳴るお寺」をキャッチコピーとして毎日18時に梵鐘で時を告げている。灌仏会などの仏教行事は勿論、夏休みのラジオ体操や秋の観月会の舞台ともなり、開かれた寺院として広く地域に親しまれる存在となった。そしてこれからも、阿弥陀の光で我々を照らし続けてくれる筈である。

本稿の執筆に際し、新田正樹氏、木村栄氏、木村尚代氏、木村慶司氏には貴重なお話をお聞きせ頂き大変お世話になりました。記して謝意を表します。

注1）栄照寺の見学及び聞き取りは2022年3月14日に行い、新田正樹氏にも御同席頂いた。更に2日後の3月16日に新田正樹建築空間アトリエにて新田氏にお話をお聞きした。

注2）堺市美原区の木材団地交差点の周囲にはウッドリーム大阪（1985）、ゲストハウスやすら木（1987）、グルメドーム（1989）、ジョイフル朝日美原店温室棟（1989）の4棟の木造の新田作品が点在していた。ウッドリーム大阪、ジョイフル朝日美原店（現、DCMダイキ堺美原店）温室棟の2棟が現存。



やすだ・てつや

1978年生れ。横浜国立大学大学院後期課程修了。川崎市立日本民家園嘱託職員、株式会社安田工務店勤務を経て2016年より現職。主な編著に『藤井厚二建築著作集補巻1』（ゆまに書房 2022年）。設計作品に深谷市稻荷町自治会屋台（2015年）。